

自然農と鍛冶屋

私は農学部出身である。せっかく農学に進んだのだから実際に農業をやってみたい。できれば環境に興味があるので、環境保全型の農業をやってみたい。でも、環境保全型農業ってなんだ？と思いながら、今までいろいろな農業の実施やお手伝いをし、自分でも田畑で農作業をしてきた。

この過程で、慣行農業（肥料や農薬などを使う一般によく行われている農業）、有機農業、自然農（その意味や内容は後で触れます）、それに水耕栽培も経験できたことは幸運だったし、現場の方々から多くの事を学ぶことができた。

ここでは、これら経験した農業の中でも大変興味深かった自然農の特徴と、自然農を実施して私が感じた鍛冶屋の必要性について書きたいと思う。

はじめに、自然農の特徴について説明し、私が感じた自然農の活用について示そう。

自然農は、全国にいろいろなやり方があるのだけれど、私が経験したのは、農薬や化学肥料を使わず（無農薬・無化学肥料）、田や畑の土を耕さず（不耕起）、雑草を基本的に引き抜かず芝のように刈り込むようなやり方であった（写真①）。

自然農の農地管理方法は面白く、初めて見る現象と多くの謎があり、これが今日の私の研究テーマの一つになっている。この自然農の特徴の一つ

として、必要とする農機具や資材の少なさがあげられる。



写真①自然農の畑

通常、専業ではなくて兼業やもっと小規模な家庭菜園のような程度でも作物や野菜を育てようと思うと、農具としては土を耕すクワ、除草用のカマ、定植用のスコップはもちろん、小型の耕うん機、草刈り機、薬剤散布機は欲しいところである。

農業資材にしても、肥料（化学肥料や有機質肥料）や病害虫防除のための農薬、土壌を覆うマルチや小型のビニルハウスなどそれなりに資材を準備しないと慣行農業をすることは難しい。

しかし、私が経験した自然農で使われる農具は「カマ」と「クワ」と「シャベル」のたった3点である。この農法は無農薬・無化学肥料・不耕起を基本とし、なるべく有機質資材も入れない方針なので、上記の3つの農具と植え付ける「種や苗」

くらいあれば、収穫まで実施可能という訳である。

さらに、自然農は、慣行農業で一般的に用いられる単一の農作物を作付けするのではなく、小規模で多品目の農作物が常に採取できるような作付けしている場合が多く、一般家庭の消費によく合った形である。

よって、ちょっと畑でもはじめてみたいけれど、いろいろ準備するのも大変そうだなと迷っている方や家庭菜園程度を想定している方にはとてもオススメの農法だと私は思っている。

実際、私がお世話になった自然農をしている組織では、近郊の都市や遠方の都市から多くの市民の方々がこの自然農を学び、実践するために通っていた（写真②）。



写真②自然農を行う市民

この組織では彼らの自然農を「農的暮らし」と呼んでいた。この「農的暮らし」は、営利を目的と

した仕事としての農業ではなく、農作物の栽培を生活に組み入れることを志向する考え方であると私は感じた。

この考えは、いままで農学があまり注目してこなかった家庭菜園や市民農園のための農法であり、都市住民が増えている昨今では農作物生産にとって重要な方法であると思い、私は大変興味を持っている。

つぎに、私が自然農を実施して感じた、鍛冶屋の必要性について書きたいと思う。

前述で説明したとおり、自然農で使う道具は、「カマ」と「クワ」と「シャベル」の3点であるので、使用頻度がどれも高く、長く使っていると道具が劣化したり、壊れたりする。

こうなった場合に、例えばクワの刃先に鋼を打ってくれたり、カマを磨いてくれたり、金属部分が折れたら溶接して直してくれる鍛冶屋がほしいと私は感じた。

調べると、日本には遠方で良ければ壊れた農機具を直して送り返してくれる鍛冶屋も存在するので、通信でやり取りすれば修理は可能である。しかし、私はできれば直接持って行って修理を依頼したいのだ。

鍛冶屋に直接行って、そこの大将と相談しているうちに、深く掘るのでシャベルの先をもっと重くした方がいいとか、重粘土の畑だからクワの刃先をもっと伸ばそうとか、農地環境に合わせてカ

スタマイズしてもらうこともできるかもしれない。

田舎の人に聞くと、昔は各地域に鍛冶屋があり、農具の修理を行っていたし、そのカスタマイズもしてもらえたらいい。

日本の鍛冶屋については専門に調べられている研究者がおられると思うので、専門外の私がしゃべるのもどうかと思うが、昔は馬の蹄鉄や刃物の修理等、いろいろ仕事があり、村や町には鍛冶屋がいたのだろう。

しかし、大量消費の現在、鍛冶屋の復活を願ってもどこにでもあるくらいの頻度で存在させることは難しいと思う。

せめて、ホームセンターなどで簡単な溶接による修理や、刃物とぎくらいやってくれれば、私としては大変助かるが、なかなか難しいのだろう。

仕方がないので、今、大学で鍛冶屋のような作業小屋を作ろうと考えている。大学圃場で用いる農機具の修理や、フィールドの実験や調査で使うちょっとした特注の道具の制作をこの大学の鍛冶屋でできないだろうか。

それは、鉄の加工はもちろん、農業機械のちょっとした改造もできるような小屋の形態がいい。木工ができていいかもしれない。

このような考えに至ったのは、私が滞在したナミビアの大学にあった、ワークショップ（日本語で訳すと作業場）という部署の存在である（写真③）。



写真③ナミビアの大学にあったワークショップ（作業所）（撮影：廣岡義博博士）

ここでは、用務員的な職員が数名いて機械の修理や溶接、木工もやっていた。圃場に使う耕うん機の改造や特注の器具の依頼など、我々研究者の無理難題に概ね答えてくれる、すばらしい働きぶりです。私は大変たすかった。

ワークショップでなくても、外国で活躍するフィールドワーカーであれば、現場の鍛冶屋に調査機材の修理や改造を依頼した経験もあるのではないかと思います。

さて、あったらいいなと思っているだけで前に進まないのが私の悪い癖なので、自分を奮い立たせるために、最近、金属の溶接と切断の資格を取得した。また、大学へ鍛冶もできる作業小屋の設立を打診し、仲間で具体的な内容を模索中である。

さてさて、うまくいくのだろうか？小屋だけ立

てて、そのうち使わなくなって、草に覆われるかもしれない。

あまりに鉄の修理や加工が面白くて、日がな一日小屋にこもり、さっぱり研究や勉強をしないダメ研究者の住家になるかもしれない。

しかし、うまくいき、何人かのフィールドワーカーでこの小屋を使用できたら、素敵な場所になると思う。鉄の農機具を前に、皮手袋を付けながら何人かの研究者と議論をしている、そのような小屋になったらいいなと想像しながら、この話を終わりたい。

渡邊芳倫（わたなべよしのり）